

銭湯ペンキ絵師

つれづれ日記

第20回 (最終回)

田中みずき (銭湯ペンキ絵師)



年末に向けて

年末になり、本年について振り返る機会が増えました。これから、あと数日で私は愛媛県に向かい銭湯に絵を描き、熊本の個人宅で絵を描き、熊本の旅館に絵を描き、京都の個人宅用の絵を制作し、銭湯に掲示するための広告を描き、大阪のホテルの浴室に絵を描き、幾つかの今後の制作のためのイメージ図を制作し、取材を受け、今年の仕事ブログに掲載し、今年が終わる予定です。まだまだ仕事は山積みですが、先の予定が見えてきました。

向かう愛媛県の銭湯は、大正湯という名前です。浴室壁面に絵を描くだけでなく、前に本連載で書いた子供たち向けのワークショップが現地で続いていく仕組みを作る予定です。現地の方のお世話になりながら自分の思うものが形になりつつあり、時の流れを意識させられてしまいます。

本連載を振り返りつつ

振り返ってみると、本連載では、スタンダードなペンキ絵へのニーズを再考してみたり、近年の少々変わった御依頼から時代に合わせたニーズの変化を鑑みたり、今後のペンキ絵について考えたりといったことをしてきました。こういった思考は恐らく銭湯のペンキ絵制作が商売として行われていく限りずっと続いていくでしょう。

恐らく、今後のペンキ絵制作に関して必要となるのは、昭和までは続いていた「職人」という概念の問題点を改善できるかという点に尽きると思います。これは、技術を学ぶことを辞めるという意味ではなく、思考する姿勢を持つということです。

昭和までの職人は、自分の思考を敢えて持たないようになってきたと言います。塩野米松氏の『失われた手仕事の思想』（草思社、2001年）によると、修行の際には本を読むことも禁じられ、ひたすら道具の管理や実技の訓練を繰り返してきた職人の姿が伺えます。多くを語らずという姿勢が粋という考えも、世の中にはあるでしょう。しかし、その結果、現代において「職人」が育っていない分野が出てきました。これは誰か

が手を抜いていたということではなく、職人へのニーズを汲み損ねていた部分があったために起きたことだと思います。現状を観ると、「昔の職人は」と郷愁に浸っている場合ではなく問題点を変革していかねばならないはずです。

例えば能の歴史を鑑みた際に『風姿花伝』といった論が構築されていく中で芸術性が深化し、現代にも続く伝統芸能としての姿が構築された歴史を鑑みても、作り手が職の歴史を学び思考して各自の論を構築していくことは重要なのではないかと考えています。様々な理論が拮抗していく中で、時代の思考というものが計算外に生み出されていくという流れができた時、時代に合ったニーズというものが鑑賞者に享受されるはずです。このニーズを掴めるか否かで、その後まで仕事が残るか否かが決まっていくはずです。

新しく生まれるペンキ絵を

この連載では、そんなことを思いながら銭湯ペンキ絵の制作について考えていることをまとめてきました。今後、自分の技術は高め続けていかねばなりません。それと並行して、後の世代のことを考えていかねばならないでしょう。既に三十代半ばの自分としては、年齢を逆算して焦ることもあります。

2016年5月から始まった本連載、今回が最終回となります。書こうと思っていたテーマを並べる中で、終わりを決めました。つれづれと続く連載をお読み頂き、ありがとうございます。現在、来年の銭湯でのイベントのために幾つかの打合せを行っており、今後も銭湯でのペンキ絵の役割を模索する日々が続くそうです。まだまだ日本中で知らぬ間にペンキ絵が描かれていくかと思われ、ぜひ、その目で新たに生まれたペンキ絵をご覧頂き楽しんで頂けましたら幸いです。

プロフィール ● 1983年大阪生まれ。幼少時から東京在住。筑波大学付属高等学校進学後、明治学院大学在学中に銭湯ペンキ絵師・中島盛夫氏に弟子入り。現在は独立し、銭湯のペンキ絵のほか、老人ホームの浴室や店舗など制作の場を広げている。現代美術展覧会・レビュー情報サイト「カロンズネット」元編集長。ペンキ絵制作に関する活動は、ブログ「銭湯ペンキ絵師見習い日記」(<http://mizu111.blog40.fc2.com/>)にて随時掲載。